

4月29日ワークショップ第1グループまとめ

メンバー：高校生のTさん、市議会議員のTさん、大好きの会のSさん、元他市の図書館長のMさん、守谷信二

WS冒頭の全体会で、いま私たちがテーマとしている「公立図書館を市民参加によって支える」という発想は、果たして「市民協働」といえるのだろうか。単なる外部委託ではないのか」と発言されたMさんに、改めて補足の発言をしてもらった。

○話を聞いている限り、現在市はなにも具体的なことを示さずに、市民の話し合いの結果を待っている状況のようだ。市民協働・参画というのなら、市と市民の役割分担を明確にして、それに市民が賛同できるかどうかということでないか。

○図書館で大切なのは専門職員で、軸となる者がいないというのはいり得ない。そうした図書館としてのあり方や、予算等の条件を市が示さないのは無責任である。また、地域の人がカウンターを担うというが、顔見知りカウンターにいと何を讀んでるか知られてしまうので嫌だ、という市民は多い。現職の頃、臨時職員を採用しても、居住地の近くの図書館には配置しないことにしていた。

こうした点について、若者の立場からTさんに意見を言ってもらった。

○もし、市民で運営することになり、担ってくれる方を募集すれば、本や図書館が好きという人は、手を挙げるのではないか。自分も学校の合間にボランティアができれば、やるかもしれない。

○読書のプライバシーの問題は、いまは職員の手を通さずに借りられる自動貸出機などもあるのでクリアできるのではないか。映画会「疎開した40万冊の図書」の感想にも書いたが、鶴川図書館を残すためには、Wifi環境などは絶対に必要。次世代にも理解され愛される、受け継がれる図書館に成るように、いまの人たちも次の世代と交流するべき。小学校や地域の若い人と繋がる活動が必要だと思う。

市議のTさんから、

○市は初め「貸出場所としてのみ残す」としていたが大分変わってきた。それは、「大好きな会」の皆さんの運動の成果だと思う。地域住民による協働の考え方も有るが、ぜひ市立図書館として残せるようにしたい。

○公立図書館のシステムとして残せないと、市民だけではゆくゆく追い詰められてしまうのではないか。

○これまでのWSでは「レファレンス機能」を知らない人もあり、他の組織の人々とも関わる中で、図書館をどう発信していけるかが大切だと思う。授業支援など、図書館業務にも多様性の広がりが始まっている。本を大切にするとスポーツ等の本以外の人々との繋がりも必要。視点の異なる他分野とも話すことで、図書館を良くするヒントが得られるのではないか。

Sさんからは、

- これまでのWSでの議論では、市財政の切迫が理由とされ、行政の手抜きの肩代わりにされはしないかとの意見や「五輪の排除などを主張するのは多様性の否定ではないか」といった多角的な視点も大事との意見もあった。市民側にも市に任せるだけでいいのかとの流れもある。図書館運営で市と市民の役割分担はどうするかが問題。
- これまでも自治基本条例や「ごみゼロ市民会議」など、市民自治のいろいろな運動に関わってきたが、そこには何でもかんでも行政に丸投げで良いのかという考え方がある。

再度、Mさんから、

- 図書館がこれまでの仕事をそのままただ続けるというだけなら、委託でも指定管理でもできるかもしれない。公共図書館でも「子どもへのサービスは仕事ではない」と言う時代があり、それを時間かけ段々説得してサービスを拡げてきた。障がい者やヤングアダルト向けのサービスも取り入れてきた。いまある仕事から時代に即して拡げるべき仕事がある。委託や指定管理ではそれは無理。委託業者は出来る限り手間のかかる業務を減らして利益を確保する方向になる。
- 専門職の条件とは何か。ひとつは市民の読書要求に共感する力があるかどうかということ、もうひとつは、先人の仕事の枠組み（スキル）を受け継いで、次の世代に受け渡すことができるかどうかということだと思う。委託や指定管理で、プロとしてそうしたことが出来るのか。

守谷から：

- もと図書館で働いていた非常勤の司書の人たちが、図書館の指定管理化に際して自分たちでNPOを組織して受託した相模大野図書館の例がある。意欲ある職員の方々がいろいろと工夫して、図書館で料理教室を開いたり、様々な企画を行って利用者からも良い評判を得ていたが、結局数年で大手民間企業にとって代わられてしまった。
- 図書館には継続性が必要。予算と人をどう担保していくか。NPOなどでは不安定。何度も言うが、図書館の継続性、専門性を担うのは、自治体の直営しかないと思う。